〈巻頭言〉

# 子どもとともに

藤野　敬子

五月の朝、入園以来じっと耐えていた感じの美穂がその日は母親から離れず、帰っていく母親を追って園庭の入口の低い柵にもたれて泣いていました。ずっと門の方へ顔を向けたままの美穂を気にして、同じマンションの友達が時々、近寄ってきますが、ふり向きもしません。かなりの時間、そうしていてから柵が開いた一瞬に抜け出して、門の方へ歩き出しました。後を追う大人に気づいたようでしたが、そのまま門の外へ出ていきます。こちらも表通りへ出て、あわててエプロンを外しながらついて行きました。丸めたエプロンを手に歩いている姿を、ちらりとふり返り、おかしそうに、ちょっと笑いかけてから歩き出す美穂と、いつのまにか言葉を交わしながら歩いて、ぐるりと角を曲がった所で「ここは小学校の裏門よ。ここから入ると幼稚園の裏庭へ出るの。」「ふーん」「入ってみる？」「うん」ということで、運よく、まだ、かんぬきが閉めてなかった門の扉を、そうっと押して入ると、そこは三歳児の遊ぶ裏庭です。ふたりが何くわぬ顔をしてそこを通り抜け、物置になっている通路をくぐりぬけて表庭へ。そのまま大人が花壇の手入れに戻ったのを見て、美穂も友達の中へ入りました。

ミヒャエル・エンデが、朝日新聞に寄せた新年のメッセージの中で、中米奥地の発掘調査団のことを読んだ時、なぜかこの時の美穂の事が頭に浮かびました。その調査団では、完璧な日程通り、事が運んでいたのに、五日目に運搬役のインディアン達が、黙って輪に

なって地べたに坐りこんで、脅してもすかしても動かなくなったのです。二日経って何事もなかったようにまた歩き出したのですが、ずっと後になって、少し信頼関係ができてから明かした理由は「はじめの歩みが速すぎたので、わたしの魂(ゼーレ)があとから追いつくのを待たねばならなかった」ということだったのです。

美穂の場合も、入園前、まず家庭訪問をして母親と教師が親しくなり、それをそれとなく見ていた子どもが一クラス八人ずつ園へ来てゆったりとすごしてから入園式を迎えるという、完璧とも思える日程を組んだつもりでした。幸い、泣く子供が一人もいないと喜んでいた矢先きのできごとでした。日程を滞りなくこなせる代わりに「私たちの魂は、もうはるか以前に、途上に置き捨てられた」とエンデが歎(なげ)く大人と違って、子供はいつも魂とともにいようとします。美穂の他にも、それぞれの仕方で魂が追いつくのを待っていた子供がいたことでしょう。そしてそれは入園当初に限らず、いつも起こり得る事なのです。また問題は日程の組み方ばかりではありません。

十一月に、大きくて重い植木鉢を何とか運びこもうと苦心している五歳の女児達を見て、男児達が手伝い始めたことがあります。ところが途中で抜けてしまい、今度はふざけて邪魔をしたりしているのです。あんまり困っていると、また心配して覗きにくるというように、仕事の進捗状況は無視して、まわり道を楽しんでいます。そんな時、もし大人が「困っている友達には協力すべきだ。」と、ただそれだけを強く望んでしまうと、子供の方にも、人間味たっぷりに揺れ動く余地がなくなってしまうでしょうし、誰に言われたわけでもないのに「やっぱり手伝うよ」と手をさしのべる、さわやかさも失われてしまうような気がします。

子どもとともに立ち止まり、さわやかに揺れ動く風に吹かれていたいと願うこの頃です。

（東洋英和幼稚園）